



1990年5月12日、プラハ、スメタナ・ホールにてライヴ収録
ドキュメントは1990年4~5月収録

クーベリック/わが祖国

Part 1 1990年《プラハの春》

音楽祭オープニング・コンサート・ライヴ

- ① フアンファーレ～オペラ《リブシェ》より(スメタナ)
- ② チェコ&スロヴァキア国歌

連作交響詩《わが祖国》全曲(スメタナ)

- ③ I - ヴィシェフラト(高い城)
- ④ II - モルダウ
- ⑤ III - シャールカ
- ⑥ IV - ボヘミアの野と森から
- ⑦ V - ターポル
- ⑧ VI - ブラニーク

Part 2 クーベリック/祖国との再会

リハーサル、クーベリックのコメントを含むドキュメント

スメタナ:連作交響詩《わが祖国》より

- ① I - ヴィシェフラト 演奏およびリハーサル風景
～父ヤン・クーベリックへの墓参～インタビュー:父について
- ② II - モルダウ 演奏およびリハーサル風景
～息子マルティンの語る父、そして祖国～インタビュー:チェコ・フィルについて
～チェコ・フィル名譽指揮者への就任
- ③ III - シャールカ 演奏およびリハーサル風景
～インタビュー:音楽について
- ④ IV - ボヘミアの野と森から 演奏およびリハーサル風景
～インタビュー:祖国への想い
- ⑤ V - ターポル 演奏およびリハーサル風景
～インタビュー:自由と共産主義
- ⑥ VI - ブラニーク 演奏およびリハーサル風景
～民主化にわく市民、そしてクーベリックの帰郷～インタビュー:生命と愛

ラファエル・クーベリック 指揮 チェコ・フィルハーモニー管弦楽団



世界が感動したコンサートを完全収録。リハーサルやインタビューなど貴重な映像も併録。

共産主義体制に反対しチェコ・フィル首席指揮者の地位を投げうて西側に亡命した名指揮者クーベリックが42年ぶりに祖国を訪れ、「プラハの春」でチェコ・フィルと「わが祖国」を演奏するというこれ以上なく感動的なステージ。積年の垢を洗い落とし確信に満ちたクーベリックの音楽、チェコ・フィルが全身全霊を傾けての演奏。「わが祖国」演奏史に偉大なページを刻んだ名演です。祖国に到着した巨匠、父の墓参に訪れるシン、そして上記の音楽を裏付ける入念で感動に満ちたリハーサルの模様を収録した感動のドキュメントも併録。音楽ファン必携のDVDです。

COBO-4325 ¥2,940(税込) 140分 片面・二層 メニュー画面付 MPEG-2 / NTSC COLOR レンタル禁止 04.6.23 複製不可

4:3 トランクNo. 音声仕様 線画方式 音声内容及び言語 サブタイトルトランクNo. 内容
1 リニアPCM ステレオ オリジナル 1 日本語字幕

DVD
VIDEO

DVDビデオは映像と音声を高密度に記録したディスクです。DVDビデオ対応のプレーヤーで再生してください。
くわしい再生上の取扱方については、ご使用になるプレーヤーなどの取扱説明書をご覧ください。

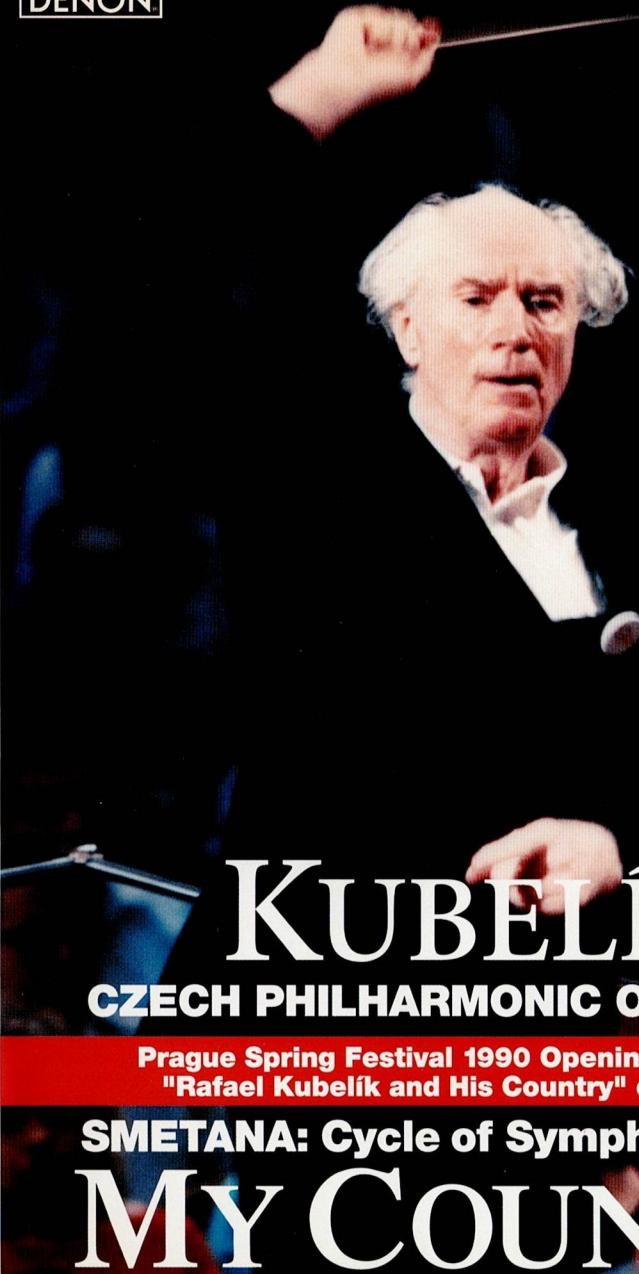
このディスクを個人的に楽しむのではなく、権利者に無断で複製(異なるテレビジョン方式を含む)、放送(無線、有線)、公開上映、レンタルなどご使用することは法律で禁じられています。

DENON

DVD
VIDEO

クーベリック/わが祖国

(1990年プラハ・ライヴ) + 祖国との再会(ドキュメント)



4 988001 949145

DENON
COBO
4325

クーベリック/わが祖国

Part I 1990年《プラハの春》音楽祭

オープニング・コンサート・ライヴ

Live at the Opening Concert of Prague Spring Festival 1990

1. ファンファーレ～オペラ《リプシェ》より (スメタナ) 1:20
Fanfare from Libuše, opera (Smetana)

2. チェコ&スロヴァキア国歌 1:41
National Anthem of Czech & Slovakia

スメタナ

連作交響詩《わが祖国》全曲

Smetana: My Country, Cycle of Symphonic Poems

3. I - ヴィシェフラト (高い城) 15:40
I - Vyšehrad
4. II - モルダウ (ヴルタ瓦) 11:34
II - Vltava (Moldau)
5. III - シャールカ 9:42
III - Sárka
6. IV - ボヘミアの野と森から 13:07
IV - From Bohemia's Woods and Fields
7. V - ターポル 12:47
V - Tábor
8. VI - ブラニーク 14:01
VI - Blaník

Part 2 クーベリック/祖国との再会

～リハーサル、クーベリックのコメントを含むドキュメント
Rafael Kubelík and His Country

スメタナ: 連作交響詩《わが祖国》より

1. I - ヴィシェフラト 演奏およびリハーサル風景 11:42
～父ヤン・クーベリックへの墓参
～インタビュー：父について
2. II - モルダウ 演奏およびリハーサル風景 11:23
～息子マルティンの語る父、そして祖国
～インタビュー：チェコ・フィルについて
～チェコ・フィル 名誉指揮者への就任
3. III - シャールカ 演奏およびリハーサル風景 8:24
～インタビュー：音楽について
4. IV - ボヘミアの野と森から 演奏およびリハーサル風景 7:22
～インタビュー：祖国への想い
5. V - ターポル 演奏およびリハーサル風景 5:54
～インタビュー：自由と共産主義
6. VI - ブラニーク 演奏およびリハーサル風景 8:08
～民主化にわく市民、そしてクーベリックの郷郷
～インタビュー：生命と愛

ラファエル・クーベリック 指揮
Rafael Kubelík conductingチェコ・フィルハーモニー管弦楽団
Czech Philharmonic Orchestra[1990年5月12日、プラハ、スメタナ・ホールにてライヴ収録、]
ドキュメントは1990年4~5月収録Dates recorded: May 12, 1990 (Live performance) at The Smetana Hall, Prague
April, May, 1990 ("his country") in Prague

©+®1990 BVA International

◆メニュー画面について

1. メニューボタンを押すとメニュー画面が表示されます。
2. ご希望のチャプターをカーソル移動ボタンで選び、決定(選択)ボタンで決定すると、そのチャプターの再生が開始されます。

4:3

●このプログラムは、4:3画面サイズ
(レターボックス)で収録されています。●このプログラムの映像には、
日本語字幕があらかじめ収録されています。

トラックNo.	音声仕様	録音方式	音声内容及び言語
1	リニアPCM	ステレオ	オリジナル

DVDビデオは映像と音声を高密度に記録したディスクです。
DVDビデオ対応のプレーヤーで再生してください。

くわしい再生上の取扱方については、ご使用になるプレーヤーなどの取扱説明書をご覧ください。

- 取り扱い上の注意 ●ディスクは両面共に指紋、汚れ、キズなどをつけないように取り扱ってください。●ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取ってください。レコード・クリーナーや溶剤などは使用しないでください。
●ディスクは両面共に、鉛筆、ボールペン、油性ペンなどで文字や絵を書いたり、シールなどを添付しないでください。●ひび割れや変形、又は接着剤などで補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないでください。
- 保管上の注意 ●直射日光の当たる所、高温・多湿な場所での保管は避けしてください。●ご使用後、ディスクは必ずプレーヤーから取り出し、専用ケースに入れて保管してください。●プラスチックケースの上に重いものを置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。

晴れやかに、高らかに、
クーベリックが帰ってきた
●歌崎和彦

1990年の「プラハの春」音楽祭は、前年秋のチェコスロバキアの民主化後初の音楽祭として、これまでになく大きな注目を集めることになった。かつてその政治体制に反対して西側に亡命していた巨匠ラファエル・クーベリックが12年ぶりに祖国に帰り、同音楽祭のオープニング・コンサートを指揮したからである。

この記念すべき年に第45回を迎えた「プラハの春」は、美しい自然と数々の歴史的な建造物に恵まれたこの古都で、毎年5月12日、つまりチェコ国民音楽の父であるスマタナの命日に開幕し、そのオープニング・コンサートには、チェコ・フィルがスマタナの代表作である連作交響詩『わが祖国』を演奏することが恒例になっている。第1回の音楽祭が開かれたのは1946年のこと、当時チェコ・フィルの首席指揮者であったクーベリックは、その記念すべき最初のコンサートを指揮しているから、音楽祭には実に44年ぶりの登場となったわけである。すでに1986年5月に、長年の手兵だったバイエルン放送交響楽団との演奏会を最後に指揮活動から身を退いていたクーベリックが、再び指揮台に復帰するには、この国の民主化に指導的な役割をはたした劇作家のハヴェル大統領とチェコ・フィルの首席指揮者だったヴァーツラフ・ノイマンの尽力が大きかったといわれるが、民主化なった祖国とその音楽祭への復帰は、クーベリックにとっても単に時間の長さだけでは測れぬ特別の感慨があったことだろう。引退後はニューヨークに居を構えていたクーベリックは、早くも開幕の1ヶ月前に祖国に戻り、名ヴァイオリリストであった父ヤン・クーベリックの墓に詣で、チェコを訪れたことのない夫人や孫娘たちに祖国を案内するなどして、英気を養っていたという。クーベリックがチェコの政治体制に反対してイギリスに亡命したのは1948年のことであったから、すでにチェコ・フィルには当時のメンバーは1人も残っていないであろうし、オーケストラとの意思の疎通のためにも十分な時間をとったにちがいない。クーベリックが音楽祭前日の5月11日に行われたゲネ・プロを公開したことにも、そうした周到な準備をへた巨匠の喜びと自信、そして祖国へのサービスぶりが伺えた。ぼくは12日にプラハに入ったために、ゲネ・プロはきくことができなかつたが、クーベリックは大変に上機嫌であったらしい。

しかし、5月12日のオープニング・コンサートは、クーベリックとチェコ・フィルにとって、また会場

の美しいスマタナ・ホールをぎっしりと埋めつくしたチェコの人々にとっても、やはり特別のものであったにちがいない。ファンファーレとともにハヴェル大統領夫妻が入場し、チェコ国歌が演奏されると、クーベリックが祖国を去った時にはまだ生まれていなかったような若い女性までが、感涙わまったようにハンカチで目蓋を押さえていたもの印象的だった。そして、そうした感激と興奮を抑えるように固唾を飲んで見守る聴衆に静かに語りかけ、万感の思いを噛みしめるようにじっくりとしたテンポではじまった「ヴィシェフラト（高い城）」の演奏には、クーベリックの長年にわたる望郷の念と、42年ぶりに祖国の土を踏んだ感慨が交差しているように思わずにはいられなかった。クーベリックの指揮を追うチェコ・フィルのメンバーの眼も、真剣そのものだった。スマタナの『わが祖国』はチェコ・フィルにとっては、まさに自家薬籠中の作品であるはずだが、やはりこの夜のコンサートは、彼らにとっても尋常ならざるものだったのだろう。めったに味わうことのできないような熱く快い緊張と興奮が会場全体を包み、オーケストラのメンバーのひとり一人が、クーベリックの懐の深い大きくうねるような指揮にすばらしい集中力と熱くしなやかな反応で応えていた。コントラバス9本という低音の力と第1ヴァイオリン8本とというチェコ・フィル全力の響きも圧巻だったし、ヴァイオリンを左右に分けたクーベリック愛用のオーケストラ配置と、それによって生まれる効果も味わい深い。特に、民族的な旋律や色彩の表出はチェコ・フィルならではの魅力で、「モルダウ（ヴルタヴァ）」の田舎の踊りをはじめ、随所に現われるこうした部分での巨匠は、実に楽しげにオーケストラをリードしていた。クーベリックにとっては4年ぶりの指揮台であり、病気のためか右手が多少不自由だと書いていたが、多くの人がフルトヴェングラーのようだというあの独特の間というかうねりをともなった動きには、そのまま祖国と作品への熱い思いがあふれているようであった。

すっきりと美しい流れの中から巧まずしてゆたかなスケール感が生まれる「モルダウ」、爽やかな集中力にとんだ「シャールカ」と、前半の3曲が終わった会場のロビーには、ハヴェル大統領夫妻も現われて気さくに人々と歓談するなど、どの顔も民主化とこの夜の演奏を喜び祝うように輝いていた。しかし、当夜の圧巻は、やはり後半の3曲だったというべきだろう。クーベリックはこの時の演奏でも、『わが祖国』の前半の3曲を3部作のように、そして後半の3作はいわば3曲が1つになった三部対の作品のような構成をとっていた。第5曲の「ターボル」と第6曲の「プラニーコ」は、ともにチェコの人々が誇りとするフス教徒の乱と

いう歴史に題材を探り、その主題も共通しているから、もともとそうなるのが当然ではあるが、クーベリックの場合は、「ターボル」と「プラニーコ」をほとんど間を置かずにつづけるなど、特にその感が強い。そして、そうしたクーベリックのこの連作交響詩に対する思いと読みか端的に示されていたのが、1984年のスマタナ没後100周年、クーベリック生誕70年を記念したバイエルン放送交響楽団との演奏会のライヴ録音だったが、この夜の演奏は、構成的にはそれを踏襲しながらも、その表現と音楽はかなり違っていて、いっそ感動的なものだった。民族的な音楽とその色彩をいかにも見事に、真摯に余裕をもって詠歌するチェコ・フィルの演奏ということもあるが、何よりもこの最後の2曲での晴れやかな音楽の力が印象的だった。バイエルン放送交響楽団との演奏が、より強くフス教徒たちの勝利への意志に貫かれていたとすれば、この演奏は、勝利への確信をより晴れやかに、高らかに表現しているといつてよいだろう。やはり民主化、解放への確かな1歩を踏みだした祖国へのクーベリックの思いが、このように晴朗にして感動的な表現をもたらしたのではないだろうか。そうしたクーベリックの指揮に対する熱くしなやかなチェコ・フィルの反応と、全員が立ち直り15分もつづいた聴衆の熱狂的な拍手にも、まさに同じ思いがこめられていたにちがいない。スマタナの『わが祖国』は、チェコの人々にとってかけがえのない作品だけはきいていたが、それにしてもこの90年「プラハの春」音楽祭のオープニング・コンサートの演奏は、やはりチェコの民主化という時とクーベリックという最良の指揮者を得た故に実現した特別のものというべきだろう。

なお、演奏者について簡単に記しておくと、ラファエル・クーベリック（チェコ読みではクベリーク）は、1914年6月29日にプラハ近郊のビホリーで生まれた。父親は有名なヴァイオリニストのヤン・クーベリックで、プラハ音楽院に学んだクーベリックは、19歳でチェコ・フィルを指揮してデビューするなど、早くから注目された。また、父親のピアノ伴奏者としても活躍して、1935~36年には父とともにアメリカにも演奏旅行し、指揮者としてもシンシナティ交響楽団に客演した。1936年チェコ・フィルの指揮者となり、42年に名匠ターリッヒの後任として首席指揮者に就任して、この間の39~41年にはブルノ国立歌劇場の音楽監督もつとめた。そして、第2次大戦後の47年にはチェコ・フィルとフランスやスイスに演奏旅行して好評を博したが、48年チェコの政治体制に反対してイギリスに亡命した。以後、1949~53年シカゴ交響楽団、55~58年ロンドンのコヴェント・ガーデン王立歌劇場の音楽監督をつとめたのち、61年にミュンヘンのバイエルン放送

交響楽団の首席指揮者に就任。1972~74年にメトロボリタン歌劇場の初の音楽監督を兼任したほかは一貫してバイエルン放送交響楽団を指揮して、手兵をベルリン・フィルとならぶドイツ最高のオーケストラに育て上げ、79年にその地位を辞したが、その後も1986年5月30日の同団との演奏会を最後に引退するまで、親密な関係をつづけた。そして、1990年に42年ぶりに祖国に帰って、かつての手兵・チェコ・フィルを指揮し、翌91年には同団と日本でも『わが祖国』を演奏して、圧倒的な感銘を与えたが、1996年8月11日イスのルツェルンで、82歳の偉大な生涯を閉じた。

チェコ・フィルハーモニー管弦楽団の母体であるチェコ・フィルハーモニー協会はプラハ国民劇場のメンバーを中心1894年に結成され、96年にドヴォルザークの指揮で最初の公的な演奏会を開いた。当時のメンバーは国民劇場の管弦楽団も兼任していたが、1901年、待遇改善をめぐって国民劇場から独立して、同年10月15日にその第1回の演奏会を開いた。以後チェコを代表するオーケストラとして、マーラーやグリーグ、R.シュトラウスなども客演し、1919年にはヴァーツラフ・ターリッヒが第4代の首席指揮者となって、世界第一級のオーケストラに育て上げた。そして、1942年からはターリッヒに代わってクーベリック、50年からはカレル・アンチャルがその地位にあり、アンチャルが去った68年からはヴァーツラフ・ノイマンが20年余りにわたってその重責を担い、多くのレコードデビングや来日公演によって、日本でも人気を博した。その後は、1990年からイルジ・ビエロフラー・ヴェク、96年からゲルト・アルブレヒト、1997年からはヴラディミール・アシュケナージが首席指揮者をつとめ、2003年からはズデニエク・マーツタルがその地位にある。

連作交響詩『わが祖国』

チェコ国民音楽の父といわれるベドジフ・スマタナ（1824-1884）が、この6曲からなる連作交響詩に着手したのは、1874年のことであった。この年ちょうど50歳となったスマタナは、以前から悩んでいた耳の病が悪化し、同年11月に第1曲の「ヴィシェフラト」を完成した時には、ほとんど聴覚を失っていた。つづいて作曲された「モルダウ」の総譜には、「まったく耳がきこえなくなつて」と記されている。作曲家にとっては致命的ともいえるこうした障害を乗り越えて、スマタナが『わが祖国』全曲を完成したのは1879年のことで、全6曲は、1882年11月5日にプラハで初演された。

1. ヴィシェフラト（高い城）

ヴィシェフラトというのはモルダウ河のほとりにそり立つプラハ南部の古城で、この曲では、この古城

にまつわる栄枯盛衰の歴史が描かれる。曲は、伝説の吟遊詩人が奏でる豊饒（ハーブ）の調べではじまり、その自由な変奏によって伝説の王たちの戦いと栄光、そして荒廃が回顧されるが、最後に再び現われて過去を追憶するこのヴィシェフラトの動機は、『わが祖国』全曲を統一するライトモティーフにもなっている。

2. モルダウ（ヴルタワ）

南ボヘミアのシマヴァ山地に源を発し、北流してプラハを通りエルベ河に合流するモルダウ河を描いた傑作で、『わが祖国』の中でも特に愛好されている。2つの水源から発したモルダウが、ボヘミアの森や草原を流れ、やがて聖ヨハネの急流に達し、さらに河幅を広げて悠々とプラハを流れ過ぎて行く様子が、狩りや農民の踊り、月光と妖精の踊り、そしてヴィシェフラトの動機などを交えて巧みに描かれてゆく。

3. シャールカ

チェコの伝説に登場する女戦士シャールカの物語を題材にした作品で、恋人に裏切られて全男性への復讐を誓ったシャールカの策謀と戦いが、きわめて劇的に描かれている。そして、スマタナはこの曲を説明して、「きき手は各自の想像力を働かせて、この物語を自由に補ってほしい」と書いている。

4. ボヘミアの野と森から

ボヘミアの美しい田園とそこに暮らす農民たちの喜びを描いたこの曲は、『わが祖国』の中でも「モルダウ」に次いで親しまれている。スマタナが、「誰もが各自の幻想に応じて絵をかくことができる」と述べているように、その音楽は野をわたる風とともに、ボヘミアの草原や森への感情を爽やかに喚起して、収穫を祝う農民たちの踊りによって華やかに盛り上がってゆく。

5. ターボル

1415年に火刑に処せられた宗教改革者ヤン・フスの志を継いで、ドイツ出身の国王とカトリック教会に反抗して立ち上ったフス教徒たちの戦いと勝利への確信を描いており、フス教徒の賛美歌「汝らは神の戦士たれ」が全曲を貫くモットーとして使われている。スマタナの愛国心が最も高揚した形で現われた傑作であり、自由と実を求めて殉じたフス教徒たちの不屈の意志が高らかに歌い上げられている。なお、ターボルはフス教徒たちの拠点となった南ボヘミアの町の名前である。

6. ブラニーカ

前曲と同じく、チェコ国民の民族意識を覚醒させた

フス教徒の革命を扱った作品で、ブラニーカはフス教徒たちが集まつた山の名前である。「ターボル」の賛美歌が共通の主題として使われ、山にひそんで眠っていたフス教徒たちが祖国の危機に際して立ち上がり、勝利を収める過程が、新しい賛美歌も交えて活写され、フィナーレにはチェコの栄光を確信するようにヴィシェフラトの動機も力強く現われる。

（1990.6／2000.8、2004.5 改訂）

クーベリックとハヴェル

●秋尾沙戸子（ジャーナリスト）

音楽祭の会場スマタナ・ホールで、隣に座っていたヘレナが目に涙をためてこう言った。

「クーベリック氏がここにいること自体、奇跡のよ」

ヘレナは今回の東欧の旅で知り合った友人だ。プラハで私は、彼女の家にステイしていた。

「こんな日が来るなんて……」

あたりを見渡すと、目頭をハンカチで押さえる人たちが大勢いた。みなこの演奏を待ちにしていたのだ。ステージでは白髪の老紳士がタクトを振っていた。

ラファエル・クーベリックだ。

この日、彼の指揮する『わが祖国』を聴きながら、チェコの人々は自由を勝ち取ったことを改めて実感したに違いない。

『プラハの春』とは、一般には1968年にチェコで生まれた、つかの間の民主的な政治体制をいう。しかし、本来はプラハで開かれる国際音楽祭の通称である。

そしてこの音楽祭で必ず聴かれる曲がある。チェコの生んだ作曲家スマタナの作品だ。彼は19世紀、オーストリアの支配に抵抗し、チェコ人の民族自決を願つてこの曲を作った。

チェコの人々は、いつもこの曲にそれぞれの愛国心を重ねあわせる。毎年、スマタナの命日である5月12日に『わが祖国』で幕を開け、6月2日にベートーヴェンの第9《歓喜の歌》で幕を閉じる。

革命後初めて開かれた今年の音楽祭は、特に国民を熱狂させた。クーベリックが42年ぶりに祖国へ戻り、指揮をとったからだ。彼はチェコに共産党政権ができるとすぐに亡命、それ以来一度も帰っていない。

「すばらしい！まさにスプリング・キッスの気分だ」

クーベリックは祖国に返り咲いた気持ちを、私にこう語ってくれた。

インタビューが許されたのは、音楽祭を2日後に控えた5月10日のことである。リハーサルのすぐ後で楽屋を訊ねると、彼は上機嫌だった。

ウイーンから飛行機で運んできたためにちょっとくたびれかけた花束を私が差し出すと、嬉しそうに受けとてくれた。そしてタクトを振って乱れた髪に軽く櫛を入れた後、ジャケットをはおると、ソファに腰を埋めた。

「これほど永く祖国を離れていたのに、またチェコ・フィルを指揮できる——そう思つただけでエネルギーが沸いてきました」

彼は5年間、病気のため指揮台に立たなかつたが、昨年11月、革命のニュースを聞いた途端、すっかり健康を取り戻したという。

「こんなに早く祖国に自由が舞い戻るなんて夢のようです。42年前、祖国を後にした時は、すぐにでも帰れるような気がしていましたが、結局40年もの歳月が流れ……。けれど、いつか必ず祖国の地を踏める信じて、自分を支えてきました」

——リハーサルはいなかででしたか。

「最高でした。海外でも、いろいろな国のオーケストラとこの曲を演奏してきましたが、スマタナほど深く祖国を愛した作曲家はないと思います。今日こうして祖国に帰って指揮したことで、私自身、スマタナとの距離が縮まった気がします」

まもなく76歳を迎えるとは思えぬほど、表情は生き生きとしていた。

このインタビューのためプラハの空港からタクシーを飛ばしたが、スマタナ・ホールに着いた時、リハーサルは既に始まっていた。

それは実に熟のこもったリハーサルだった。祖国を離れてなお祖国を思い続け、異国の地でこの曲を指揮するたび祖国への思いが募つたに違いない。いま、彼がひたすら愛し続けてきたこの曲を、生涯でもっとも魂をこめてタクトを振っている——そんな風に思えた。

音楽祭初日の演奏は、全国に生中継された。スマタナ・ホールに詰めかけた聴衆は、いずれも年配者ばかり。チケットはプレミアム付で売られていたほどである。そこで、とても手にできなかつた若者のために、前日のゲネ・プロは無料で一般公開されたのだった。

音楽祭では、マエストロもチェコ・フィルのメンバーも、胸に「市民フォーラム」のバッジをつけて演奏した。そしてハヴェル大統領も夫人とともにかけつけていた。

「市民フォーラム」は革命の際にできた市民団体である。当時、反体制劇作家として知られていたヴァーツラフ・ハヴェルを中心に、演劇人や音楽家たちが学

生デモに呼応してゼネストを呼びかけたのだった。チェコ・フィルのメンバーたちも、その重要な担い手だったのである。だから革命以来、チェコ・フィルのメンバーもハヴェル大統領も一心同体というわけだ。

チェコではハヴェル大統領は絶大なる人気を誇っていた。クーベリックの演奏から2週間後、私はルーマニアでの選舉取材を終えて、再びプラハに戻っていた。

「見て、サトコ。早く、早く！」

テレビの前でヘレナが叫んでいた。

ヘレナの家の台所では、なぜか私が炒めものに忙しい。子どもたちの夕飯を作りに帰ったはずなのに、さっきから「ヘレナママ」はテレビの前に釘づけである。

あまりに強烈なコールに負けてリビングルームに行くと、画面に映し出されていたのはハヴェル大統領。起きたばかりで歯を磨いていたところだった。寝ぼけ眼にボコッと出たおなか。大統領になつても相変わらずアパート住まいの彼の素顔である。番組は『ハヴェル大統領の1日』。1週間に一度、彼の1日を追って、テレビで放送している。

私が知る限り、チェコの人々はみな、少なくとも1枚は彼のポスターを家の中に貼っていた。独裁者のカリスマとしてではない。一貫して共産党と闘い抜いた彼の生きざまは、国民の理想だからである。

68年の民主化運動『プラハの春』がソ連軍に踏みにじられて以降、共産党の知識人に対する弾圧は一層厳しくなった。ハヴェルも劇作家の職を追われ、地方のビール工場で働くしかなかった。それでも政府批判をやめず、たびたび投獄され、革命の2週間前まで獄中にいたのだ。国民はそんな彼を全面的に信頼している。

裏返すと、チェコの人々は徹底した共産党嫌いなのである。人々は判で押したように同じことをいう。

「共産党さえなければ、チェコはもっと発展していくはずだ」と。

第2次大戦前、チェコは世界でもベストテン入りするほどの工業国だった。議会制民主主義もすんでいた。そのころの栄光は人々の心のしっかりと刻み込まれ、自信もプライドも高い。それなのに、共産党に自由を奪われ、才能を抑えられてきたというのである。

選挙を控えたプラハの街でもこうした共産党時代の圧政を暴露した路上展覧会が開かれていたものだ。人々は立ち止まり、隠されていた事実を示す写真やドキュメントを食い入るようにみつめていく。

「私たちはね、生まれるとすぐに仮面をつけさせられた。一歩家の外に出ると、共産党用の仮面をかぶるのよ。学校でもね」

ヘレナが私に教えてくれた。彼女が生まれる直前にチェコはソ連に身売りした。だから彼女自身は民主主義を知らない。けれども、親たちが、かつての誇り高

いチェコについて語り継いできたのだという。

「いつかこの仮面を外して、本音で語れる日が必ず来る」と信じていたわ」

投票所からの帰り道、ヘレナは晴れ晴れとした表情で言った。生まれてはじめて自分の意志で“選ぶ”ことが許されたからである。

6月9日。この日のプラハは革命後初の自由選挙を終えたばかり。それを祝って野外コンサートが開かれ、クーベリックは再び指揮をとった。もちろん、曲は〈わが祖国〉。会場はヤン・フスの像がある旧市広場である。中世の石畳を遺すその街角ではソフトクリームやワッフルが売られていた。

広場は数万人の人々で埋め尽くされている。ショッキングピンクやターコイスクールのシャツが陽光に映えて眩しい。

午後4時。あのハープの美しい音が中世の建物の間を駆け抜けた。老夫婦が寄り添いながら、静かに聴き入っている。お父さんに肩車された娘が熱心にステージをみつめている。金髪の若いカップルが群衆に埋もれながらキスしている。誰もがプラハの春の到来を心から喜んでいる。そして、演奏が終わった。

割れんばかりの拍手のなか、いきなり一人の男が飛び出してきた。ステージに駆け上がり、マエストロと抱き合っている。

——ハヴェル大統領だ。

それは、熱く堅い抱擁だった。選んだ道は違ったけれど、仮面をつけることをかたくなに拒み、素顔で生きようとした二人の男、クーベリックとハヴェル。一人は祖国を離ることで、一人は祖国にとどまることで、しかし、いずれも体制と闘い続け、祖国を思う気持ちは同じだったのである。

(1990.10/2000.8一部校訂)

ラファエル・クーベリックの 帰還

●カレル・ムレイネク

チェコスロヴァキアの音楽文化において、クーベリックといえば、著名かつまた山積ある名前である。ヤン・クーベリックは今世紀初頭の世界的なヴァイオリニスト。その息子ラファエルは指揮者として作曲家として、家系の伝統、つまり素晴らしい大きな音楽的才能を受け継いだのである。20歳の時、後に首席指揮者となるチェコ最高のオーケストラであるチェコ・フィルハーモニー管弦楽団を初めて指揮。それからまもなく

ブルノでオペラを指揮し、1948年からはチェコ・フィルハーモニー管弦楽団の指揮者になった。しかし、共産主義の独裁が勢力を増すようになって、クーベリックは亡命してしまう。以来、政治的に操作されるようになってしまったチェコの文化にクーベリックは関わることはなかった。その名は文献から消え、かれの設立した国際的な音楽フェスティヴァル『プラハの春』の歴史からも抹消された。政府の妨害はさらに続く。海外へ演奏旅行に出かけたチェコの音楽家たちはクーベリックと会うことも許されず、それをした者は不快な報復を覚悟しなくてはならなかった。こうした状況の中で、ラファエル・クーベリックその人、ましてや指揮者としてのかれにいつかは会えるだろうという希望が失われたのも仕方のないことだった。国外にでることすら許可されなかつた私たち。クーベリックにいつか再会できるということは、祈りといつてもよい空想の産物に過ぎなかつた。

しかし、いま再び、ラファエル・クーベリックはその芸術的な偉大さと人間としての在り方を私たちの前に現したのだ。

1990年春、共産主義政権が倒れた11月のビロード革命から半年後。クーベリックは祖国の復興を喜び、いつでも援助を惜しまないと、この国に戻ってきた。かれはフェスティヴァルの始まる前にプラハに到着、プラハの街を家族と歩いたり、指揮者部門の審査委員長を務めたりもした。

そして、ついに、指揮棒を手にしてチェコ・フィルハーモニー管弦楽団の前に歩み出た。『プラハの春』フェスティヴァルのオープニング、スマタナの『わが祖国』を指揮するために。亡命中に世界中で演奏してきた作品、祖国に対する気持ちを表してあまりある『わが祖国』を。

クーベリックはプラハの舞台に凱旋した。これほど象徴的な帰還があつただろうか。76歳になったクーベリックは、近年その指揮者としての活動を妨げていた肉体的な支障を克服し、大観衆の前に姿を現した。テレビを観ていた数百万の人々の中に、このコンサートのあいだ中、肉体的、そして精神的な問題を予期した者はいなかつただろう。プラハにいるという新しい事実がクーベリックに新しいエネルギーを与えたのだ。

私は、かれの演奏を二度観た。

最初はテレビで。私たちはかれの一挙手一投足を見つめた。『わが祖国』の演奏は緊張感にあふれ、革命の興奮のように熱いものだった。チェコ・フィルは、それまで蓄えていた最高のものを吐き出した。

その次は、スマタナ・ホールでのコンサートだった。クーベリックの指揮は、テレビで観るよりももっとず

っと印象的だった。もちろん、それは観衆の醸し出す素晴らしい雰囲気のせいでもあったろう。大きな歓声で指揮者を迎え、その興奮はコンサートの終わるころには最高潮に達した。また驚かされたのは、舞台上のオーケストラの配置だ。クーベリックは今までの伝統なく、楽器を移動したのだ。オープニングを奏でるハープを指揮台の前、他の楽器よりも高いところに置いた。コントラバスは左へ、管楽器は右へ。まったく普通と逆である。すると、オーケストラは突然、常識を越えた色彩と清新さで、新しい音を響かせたのだ。

クーベリックは、自由の尊重や真実への願望をこめて、『わが祖国』を指揮し、国家への賛美を高らかに歌い上げた。

クーベリックはその後もたびたびプラハを訪れて、11月にはプラハ室内管弦楽団と再びこの曲を演奏している。もはやクーベリックとチェコの間を妨げるものは何もないのだから。

クーベリックを崇拜する者たち、すなわち音楽芸術を愛する者たちは、チェコの文化が誇りとするこの偉大な音楽家の帰還を、それはそれは待ち焦がれていたのだ。

©Karel Mlejnek 1991

Staff

[Live performance]

Director : Adam Rezek
Photography : Jiří Kadařka
Technical leader : Miloš Živec
Recording director : Zdeněk Zahradník
Recording engineer : Jan Kotzmann
Produced by Supraphon, Prague
Coproduction with Bayerischer Rundfunk and ORF

[His Country]

Theme : Vladimír Škutina
Script : Jiří Reichl
Script Editor : Jiří Pilka
Sound : Jan Kotzmann, Tomáš Stern
Editor : Jindřich Frýda
Assistant Editor : Miloš Živec
In collaboration with : Pavel Pokorný
Martin Dvořáček
Jan Matura
Miroslav Král
Vítězslav Marek
Jaroslav Červinka

Production : Lucie Byrodotová
Photography : František Ulrich
Vratislav Damborský
Jaroslav Brabec
Josef Hruška
Directed by : Milan Maryška
Special thanks to : Rafael Kubelík's family
Czech Philharmonic Orchestra
Czechoslovak Film Archives
Original Videojournal

©+©1990 BVA International